

試験研究成果普及情報

部門	土壌・肥料	対象	普及
課題名：土壌モニタリングアンケート調査による施肥及び堆肥施用の実態（2巡目）			
<p>[要約] 平成16～20年度の施肥量は平成11～15年度に比べて、露地野菜、施設野菜及びナシでは減少し、水稲、ビワ・ミカン及び施設花では変化がなく、畑作物及び露地花きでは増加している。水稲及び畑作物（普通作）では堆肥施用農家割合が増加している。</p>			
キーワード 施肥量、堆肥、アンケート調査			
実施機関名	主 査 農林総合研究センター・生産環境部・土壌環境研究室 協力機関 各農林振興センター		
実施期間	2004年度～2008年度		

[目的及び背景]

農業の生産基盤である農耕地土壌は営農活動等を通じて変化する。平成11～15年度に実施された土壌モニタリングアンケート調査（1巡目）によって、施肥量等の実態を明らかにした。1巡目から5年後となる平成16～20年度に、1巡目と同一の地点でアンケート調査を行い（2巡目調査）、5年後の施肥量等の変化を明らかにする。

[成果内容]

- 1 水稲では1巡目に比べて施肥量に変化はなく、ケイ酸資材施用量及び堆肥の施用農家割合が増加した（表1及び表2）。
- 2 畑作物（普通作）では1巡目に比べて窒素施肥量及び堆肥施用農家割合が増加した。
- 3 露地野菜では1巡目に比べて窒素、リン酸及び加里の施肥量と石灰資材が減少し、堆肥施用農家割合に大きな変化はなかった。
- 4 ビワ・ミカンでは1巡目に比べて施肥量に大きな変化はなく、堆肥の施用農家割合が大きく減少した。ナシでは、窒素及び加里の施肥量が減少し、石灰資材施用量が増加した。
- 5 施設野菜では、1巡目に比べて窒素及びリン酸の施肥量が減少した。
- 6 1巡目に比べて、施設花では施肥量に変化はなく、露地花きでは窒素、リン酸及び加里の施肥量が増加した。

[留意事項]

ここに示した施肥量等は県内の平均値であり、個々の農家・圃場では異なる可能性がある。

[普及対象地域]

県下全域。

[行政上の措置]

[普及状況]

[成果の概要]

表1 モニタリング2巡目調査における作物別施肥量

作物	調査数	施肥量(kg/10a)		
		窒素	リン酸	加里
水稻	73	6(6)	8(8)	7(7)
畑作物(普通作)	21	6(3)	9(9)	8(10)
畑作物(カンショ)	6	3(1)	4(11)	4(5)
露地野菜	59	12(16)	13(16)	11(14)
ビワ・ミカン	9	14(13)	12(8)	6(5)
ナシ	29	23(32)	23(25)	11(15)
施設野菜	33	19(23)	21(24)	16(17)
施設花	20	16(16)	18(16)	16(16)
露地花き	4	27(19)	27(16)	27(22)

注1)施肥量は1作当たりである

2) ()内の数値は、平成11～15年度のモニタリング1巡目調査のものである

表2 モニタリング2巡目調査における作物別のケイ酸・石灰資材及び堆肥の施用量

作物	ケイ酸・石灰資材	堆肥	
	施用量(kg/10a)	施用農家割合(%)	施用量(kg/10a)
水稻	6(3)	10(2)	73(3)
畑作物(普通作)	6(31)	30(7)	349(36)
畑作物(カンショ)	4(15)	17(19)	340(344)
露地野菜	28(47)	46(40)	980(718)
ビワ・ミカン	6(0)	0(29)	0(243)
ナシ	217(38)	86(82)	1,581(1,601)
施設野菜	18(28)	49(53)	1,058(1,601)
施設花	18(25)	55(55)	239(833)
露地花き	0(0)	25(66)	750(1,136)

注1) ()内の数値は、平成11～15年度のモニタリング1巡目調査のものである

2) ケイ酸・石灰資材は水田がケイ酸資材、その他の作物は石灰資材を示し、ケイ酸・石灰資材及び堆肥の施用量は、無施用農家も含めた平均の施用量

3) ケイ酸・石灰資材及び堆肥施用量は1作当たりである

4) 水田の稲わらすき込み率は80%

[発表及び関連文献]

- 1 土壌モニタリングアンケート調査による施肥及び堆肥施用の実態（平成16年度試験研究成果普及情報）
- 2 平成21年度試験研究成果発表会（作物部門、野菜部門2、果樹部門1）

[その他]

農林水産省土壌保全対策事業「課題名：土壌機能実態モニタリング調査」